慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	1905年のロシア革命と日本の社会主義 : ヨーロッパ労働運動の日本の社会主義への影響
Sub Title	Russian Revolution of 1905 and Japanese socialism : the influence of European labour movement on Japanese socialism
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1973
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.66, No.1 (1973. 1) ,p.1- 19
JaLC DOI	10.14991/001.19730101-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19730101-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

1905年のロシア革命と日本の社会主義

——ヨーロッパ労働運動の日本の社会主義への影響——

飯　田　　鼎

(1) 序　論

(2) 「社会主義神髄」と「我社会主義」

(3) 1905年のロシア革命の影響

(4) 直接行動，ゼネラル・ストライキ，大衆ストライキおよび大衆運動の意味

(1)

1900年から第1次世界大戦の勃発までの10数年は，現代の歴史の上でも，全世界的な規模の下で発展するさまざまな矛盾が，いわゆる帝国主義の出現として象徴的にのべられるように，集中的にあらわれた時期である。

たとえば，イギリスにおいては，ボア戦争の帝国主義的昂奮の中でのイギリス労働党の成立に具体化された労働運動の前進とこれを阻もうとする支配勢力の動き[(1)]，そして1910年から14年までき

注(1)　1899年から1902年の間に，はげしく闘わされた Boer War は，Cecil Rhodes を頂点とするイギリス金融資本の主導の下に行われたが，その戦争は，実に，イギリス労働党の成立とこれにたいする保守党の敏感な反応としてのタッフ・ヴェール事件という国内の労働および社会問題と密接な関係をもっている。Cecil Rhodes は，その帝国主義的思想について，1895年にその親友でジャーナリストであったステッドにつぎのように語ったことは，社会的危機におびえるこの時期の時代的雰囲気を読みとる上でも，きわめて興味深いものを秘めている。「私は昨日，ロンドンのイースト・エンド（労働者街）にゆき，失業者たちのある集会をのぞいてみた。そして，そこでいくつかの野蛮な演説をききー——演説といっても，じつはパンを，パンを！　というたえまない叫びにすぎなかったのだが——家に帰る道すがら，その場の光景についてよく考えてみたとき，私は以前にもまして帝国主義の重要さを確信した。……私の心からの理想は，社会問題の解決である。すなわち，連合王国の4,000万の住民を血なまぐさい内乱から救うためには，われわれ植民政策家は，過剰人口の収容，工場や鉱山で生産される商品の新しい販売領域の獲得のために，新しい土地を領有しなければならない。私のつねづね言ってきたことだが，帝国とは胃の腑の問題である。諸君が内乱を欲しないならば，諸君は帝国主義者にならなければならない」（レーニン「帝国主義」，宇高基輔訳，岩波文庫，130～131頁）。なお，ボア戦争についてのイギリス国内政治と労働者階級運動についての研究としては，Richard Price, An Imperial War and the British Working Class, Working-class Attitude and Reactions in the Boer War 1899-1902. が興味深い。なお邦文としては，入江節次郎「独占資本イギリスへの道」ミネルヴァ書房，1962年，第3章および鈴木正四「セシル・ローズ」誠文堂新光社，1960。後にふれるように，幸徳秋水の「帝国主義」は，このボア戦争の最中に執筆されており，独占資本と帝国主義との関連については，わずかに，「ツラスト」という表現をみるにとどまり，その分析は未熟であるけれども，「軍国主義」と「愛国主義」とをもって帝国主義の中心的問題としているのは，印象的である。20世紀初頭のヨーロッパの危機は，幸徳によって，見事に把握されていたということができる。

わめて短い期間ではあったが，怒濤のようなはげしさをもって進展した「産業上の大不安」(Industrial Great Unrest) は，Anarcho-syndicalism のイギリス労働運動への影響[2]とともに，一時，革命的な危機をつくり出したといわれる[3]。

フランスでは，資本主義の新しい状勢の展開を迎え，革命的サンディカリズムが，労働者の組織に影響をあたえ，たんなる全国労働取引所連盟を中心とする地域的な小型な労働組合の結集体と巨大な産業別組合が主導権を握っていた労働総同盟との統一が，1902年の大会で実現し，以後，労働総同盟 (CGT) に加盟する組合は，この2つの自律的なセクションに同時に属することとなり，革命的サンディカリストの思想が，資本に対決するために，同一の職業または産業に属する労働組合が，全国的規模に結集することを可能にしたということができる[4]。そして1900年以後，ゼネラル・ストライキ論がにわかに活潑となり，1906年には，8時間労働制を要求する大規模なメーデーをはじめとするゼネラル・ストライキ的状況を形づくることとなった。

ドイツは，周知のように，19世紀以来，急速な勢いでたかまってきた社会民主党内の修正主義運動が1903年，第2インターナショナル，ドレスデン大会および1904年のアムステルダム大会において頂点に達し，社会主義戦線における分裂が決定的となるとともに[5]，一方において修正派マルクス主義としてのベルンシュタインにたいする闘いが，中央派を含む広汎な左派によって行われ，この対立は，ドイツを超えて全世界的な規模に拡大されるに至ったのである。

そのほか，アメリカ合衆国においても，1901年に，Eugine Debs と Maurice Hillquit の指導の下にアメリカ社会党が建設され，1904年に世界産業労働者組合 (I・W・W) が結成され，ゼネラル・ストライキをその戦術として，明らかに根強い Anarcho-syndicalism の影響下にあった[6]。

また Anarcho-syndicalism の重要な根拠地ともいうべきイタリアにおいても，1906年，労働総同盟 (Confederazione Generale del Lavoro) が結成された直後，ローマにおいて社会党第九回大会が開かれ，革命的サンディカリストと改良派との間にはげしい論戦が展開され，全体として，イタリア資

注(2) イギリスにおける Syndicalism の影響をうけ，イギリスの土壌において，Syndicalism 運動および理論の深化に貢献したのは G.D.H. Cole である。その意味で，Cole の The World of Labour, 1913 は重要な文献である。Cole にはそのほか，これに関連あるものとして，Self-government in Industry, 1917, Guild Socialism Restated, 1920 が注目されよう。もちろん，Cole 以前に，Orage および Penty という先駆者があったが，Cole の役割は，大きい。なおくわしくは，Margaret Cole, The Life of G.D.H. Cole, 1971, London をみよ。

(3) Syndicalism のイギリス労働運動の影響からみて忘れることのできないのは，アイルランドのベルファーストを中心とする波止場，運輸および鉄道従業員などの第1次世界大戦を前にしてのはげしいゼネラル・ストライキの動きであり，こうした革命的な労働運動と結びついた第一次大戦中の James Connolly の民族独立のための革命的な蜂起も Syndicalism から，大きな影響をうけたものとして，重要である。この問題については，上野格「J. コノリー，その社会主義とナショナリズム」(成蹊大学経済学部創立二十周年記念論文集，昭和45年11月) をみよ。

(4) 喜安朗「革命的サンディカリズム——パリ・コンミューン以後の行動的少数派」，1971年，河出書房新社，257頁以下をみよ。

(5) W. Z. Foster, History of the Three Internationals. New York, 1955. 長洲，田島共訳「国際社会主義運動史」(上) 大月書店，190頁以下参照。

(6) Foner, History of Labour Movement in the United States, vol. 4, New York, 1965.

本主義の危機に照応していた。[7]

以上の考察によって明らかなことは，この時期，とりわけ，1905年以後，労働運動において革命的サンディカリズムの影響が濃厚にあらわれていることが印象的である。このように，1900年から1914年までの短い時期，Anarcho-syndicalism の運動が，いまだかつて見ないほどの規模で昂揚したのは，一体どのような理由によっているのであろうか。それは，大きくわけて3つの原因に帰することができるのではなかろうか。ひとつは，独占資本主義段階にともなう技術化の急激な進展と労働者の疎外状況の深刻化，そして第2に労働者意識の変化，そしてこれに対応すべき労働者組織の立ちおくれと，さらに第3に，労働者政党の体制内化および官僚化である。この3つの要因を根柢として，1905年のロシア革命の衝撃が考えられるであろう。この革命を契機として，国際的な社会主義運動と労働運動は，まったく新たな段階に入ったということができる。革命的サンディカリズムが，とりわけこの時期に，ヨーロッパ労働者階級の運動を深刻に揺り動かした結果として，当時の革命的労働運動の指導者の思想にも，従来の伝統的古典的マルクス解釈——ドイツ社会民主党において，中央派を代表する Karl Kautsky のそれによって象徴される——とは対立して，新しい状勢に対応して，マルクス主義を創造的に発展させようとする試みがなされたのであって，I. V. Lenin と Rosa Luxemburg がそのもっとも代表的な革命的理論家であり，彼らの革命思想が，この時期を転機として，いちじるしい深まりを示しているのをみても，それは明らかである。それでは，この1905年を中心とするヨーロッパにおける革命的な労働運動の状況は，日本の社会主義にどのような影響を及ぼしたのであろうか。こうした海外の状勢に敏感に反応し，日本における社会主義運動の理論を構築しようとして，まったく対照的な立場に立ったのは，片山潜と幸徳秋水であって，明治における日本の社会主義は，この2人の先駆的な思想家の理論的対立を基軸として転回する。

（2）

日本における社会主義思想の由来は意外に古く，すでに明治10年以前に，加藤弘之や西周が，社会主義や共産主義に言及しているといわれるが，明治20年代までのこれらのヨーロッパ社会主義が，明治30年代における社会主義運動にたいして，どのような影響をあたえたかは必ずしも明らかではない。[8] おそらく，明治10年代の澎湃としてたかまる自由民権運動のなかで輸入された社会主義は，

注（7） 山崎功「イタリア労働運動史」青木書店，1970，Ⅷ，改良主義・革命的サンディカリズム。

（8） 明治の社会主義研究にとって，「明治文化全集」第6巻（社会篇）および第15巻（社会編，続）は，必読の文献というべきであろう。そして前者には，明治の社会主義の研究に不可欠な，片山潜，西川光二郎「日本の労働運動」，石川旭山，幸徳秋水「日本社会主義史」および山路愛山「現時の社会問題および社会主義」がおさめられ，そのいずれもが，日本における社会主義の歴史をはじめるにあたって，いずれも明治10年代の自由民権運動から書きはじめており，両者の関連に注目を払っていることがわかる。これは，日本の社会主義が，「反体制」という観点よりは，絶対主義的明治政権にたいする批判としての「近代思想」の一翼を形成するものとしてとらえられているからにほかならない。

たとえば樽井藤吉の東洋社会党の島原における創立[9]にみられるように，自由民権運動のなかから，次第にこれを超えるものとして立ちあらわれたのだと考えられる。いまここでその思想について考察しようとする幸徳秋水にしても，後に幸徳等とともに大逆事件に連座した奥宮健之などをみても，明治の社会主義は，明治10年代に輸入された外来思想としての社会主義が，自由民権運動を媒介にして，日本の風土に定着し，日本の社会主義の骨骼を形成したものということができるであろう[10]。すなわち，日本における社会主義は，一方において外来の思想であるとともに，他方において，自由民権思想の一翼を形成するものとして，「日本の近代化」のための理論的武器に転化したということができるであろう。幸徳秋水の社会主義への関心，従って社会主義運動への参加は，明治30年代の初頭にはじまる。すなわち，明治30年4月，「社会問題研究会」に入会し，さらに社会主義研究会に入会するに及んで，決定的な第一歩が印されたとみることができるが，この時期の彼の社会主義は，外国書の翻訳的紹介の域を出なかったものと考えられる。すなわち明治36年（1903年）に公刊された「社会主義神髄」は，参考文献として，Marx, Engels, Kirkup および Ely 等をあげており[11]，当時としてはかなりの水準であったにしても，理論的な独創性はみられず，外国文献の解説的な色彩が濃厚である。しかし注目すべきことはこの同じ明治36年に，社会主義という点では幸徳に大きな影響をあたえた片山潜の「我社会主義」が，同時に出版されているという事実である。この当時はまだ，この両名の思想的な対立が明白ではなかったが，のちに，直接行動論をとなえる幸徳の革命的サンディカリズム論と片山の議会改革論が真向から対立する運命にあったこの2人の主著が，ほとんど時を同じくして出版されていることは，きわめて興味深いものがある。この著は，同じ年に刊行された片山の「都市社会主義」と2年前に公刊された幸徳の「帝国主義」とともに，彼らの初期の思想を知る上での重要な文献であって，これらの著作のなかにすでに，両者の社会主義にたいする認識の点で，微妙なニュアンスの差異をみることができよう。

注(9)　赤松克磨は，東洋社会党の創始者樽井藤吉について，「樽井は独創力に富んだ一種の天才であった」として，「西洋の虚無党が狂暴な行動に出るのに対して，東洋の虚無主義は，倫理道徳を基準とする最も正しい思想であると信じ，自分は東洋の虚無党を作ろうと考えたのである。東洋社会党の綱領にあらわれた「道徳」，「親愛」，「平等」などの観念は，すべて東洋思想が根柢をなしている」とのべている（赤松克磨「日本社会運動史」岩波新書，10～11頁）。マルクス主義やアナーキズムでもなく，その綱領からは一種の空想的社会主義の傾向を読みとることができよう。

(10)　大原慧「日本の社会主義(その2)――幸徳秋水の思想形成――」（東京経済大学会誌第67号，1970年8月）を参照。

(11)　幸徳は，「社会主義神髄」の冒頭の自序に，「本書執筆の際，参照に資せしは，

Marx, K. and Engels, F. Manifesto of the Communist Party.

Marx, K. Capital: A Critical Analysis of Capitalist Production. として，この2冊の代表的な著作のほかに数冊の著書を掲げている。「共産党宣言」の題目も不正確であるが，これはともかくとして，「資本――資本家的な生産の批判的分析」をあげている。「経済学批判」という副題ではないとすると，「資本論」の英訳ではなく，誰かの解説本を読んだことも考えられる。「資本論」の英訳は，1885年10月から，John Broadhouse（これはおそらく H.M. Hyndman 自身であると思われる）の英訳が行われ，その後1887年，Samuel Moore と Edward Aveling との共訳が，Engels の監修の下に出版された（経済学史学会編「『資本論』の成立」1967年，岩波書店，第3部『資本論』第1巻の反響，都筑忠七稿，イギリス，同書，389頁）。しかしこの英訳書を幸徳が読んだかどうかは不明である。「社会主義神髄」の内容からすると，「資本論」は読まなかったことの可能性の方が大きい。しかし「共産党宣言」は，周知のように，明治37年，堺利彦との共訳を完成し，公刊したのである。

幸徳の「帝国主義」は小冊子ながら，J. A. Hobson の古典著作「帝国主義」よりも1年前に，そして Lenin の「帝国主義」に先立つこと15年，明治34年に出版されたことからも，彼の世界史的認識の尖鋭さを窺うことができよう。第1章緒言，第2章愛国心を論ず，第3章軍国主義を論ず，第4章帝国主義を論ず，第5章結論という構成からも明らかなように，帝国主義の本質をもって，幸徳は軍国主義＝無制限な国際的軍備拡張競争こそが，帝国主義の推進力であることを強調している[12]にもかかわらず，独占資本の形成が，軍国主義と密接不離の関係にあることがまだ充分に把握されてはいない。また検閲をおそれたとはいえ，皇室にたいする言及が，不必要と思われるほど妥協的であって，果してこれが秋水の本心であったかどうかを疑わしめるものがある[13]。しかし以上のよ

注(12) 「然り其発展の迹に見よ，帝国主義は所謂愛国心を経となし，所謂軍国主義を緯となして，以て織り成せるの政策に非ずや。少くとも愛国心と軍国主義は，列国現時の帝国主義が通有の条件たるに非ずや。故に我は曰はんとす，帝国主義の是非と利害を断せんと要せば，先づ所謂愛国心と所謂軍国主義に向って，一番の検察なかるべからずと」（幸徳秋水「帝国主義」岩波文庫版，17頁）。この一文には，幸徳の「帝国主義」の真髄を見出すのであるが，さらに，その軍国主義については，「然り軍備拡張を促進するの因由は，実に別に在る有り。他なし一種の狂熱のみ，虚誇の心のみ，好戦的愛国心のみ，但た武人の好事にして多く韜略を弄するが為めにするも亦之有り，武器糧食其他の軍需を供するの資本家が，一攫万金の巨利を博せんが為めにするも亦之れ有り，英独諸国の軍備拡張に在ては是等殊に与って力ありき。然れども武人や資本家や，能く其野心を逞くするを得る所以の者は，実に多数人民の虚誇的好戦的愛国心の発越の機に投じたれば也」（上掲書41頁）とのべている。ここには，帝国主義の原因について，軍国主義＝軍備拡張を第1のものとし，植民地獲得競争の背後にひそむ巨大独占体の形成（のちに，「社会主義神髄」において把握される『ツラスト』）との関係についての理解は欠いていることが注目されよう。

ただ，幸徳が軍国主義を論ずるにあたって，強調しているのは，1870～71年の普仏戦争にあたってのビスマルクの侵略主義＝アルサス・ローレーヌの合併であり，ボア戦争であった。とくに，ボア戦争は，この書の執筆に大きな影響をあたえたものと考えられ，深い考慮を払っている（上掲，58頁，70～72頁）。

「社会主義神髄」には，その執筆に際しての参考文献が列挙されているが，「帝国主義論」においては，一切あげられていない。わが国の帝国主義研究において不滅の足跡を残したこの業績が，基本的にどのような西欧の文献に依拠したかは明らかではない。Hobson や Lenin の「帝国主義」以前に，一般によく知られまた読まれた帝国主義論研究は，寡聞な筆者の知る限りでは，J.R. Seeley, The Expansion of England, 1883, London であるが，しかしそれも想像の域を出ない。

大原慧氏は，幸徳が，師中江兆民の推挙により，明治26年9月，「自由新聞」社に入社し，外電翻訳係として苦労し，のちに明治28年5月，やはり翻訳雑報係として，「中央新聞」に入社したことについてふれ，「『万朝報』紙上に，国際情勢にたいする鋭敏な反応を示した『論説』を展開していくことを可能にしたのは，この下積み時代の苦労が結実したものであった。それはさらに，明治34年に至って『廿世紀之怪物帝国主義』へと結実されていくこととなる」とのべているのは重要な指摘である（大原慧「日本の社会主義〔その2〕――幸徳秋水の思想形成――，東京経済大学会誌第67号所載，1970年8月）。ボア戦争の勃発と拡大とを「帝国主義」として冷静にうけとめた幸徳の時代的な感覚と歴史にたいする洞察力の鋭さが抜群であったことはいうまでもないが，要は，産業革命の展開期に日本にもヨーロッパ帝国主義が怒濤のようにおしよせていたことを，幸徳がきわめてリアルに示唆していることである。

(13) 天皇についての幸徳の叙述としては，つぎのような文章が見出される。すなわち，「日本の皇帝は独逸の年少皇帝と異り，戦争を好まずして平和を重んじ給ふ。圧制を好まずして自由を重んじ給ふ，一国の為めに野蛮なる虚栄を喜ばずして，世界の為めに文明の福利を希ひ給ふ。決して今の所謂愛国主義者，帝国主義者に在らせられざるに似たり。然れども我日本国民に至っては，所謂愛国主義者ならざる者寥々として晨星也」（上掲書34頁）。この文章の末尾は微妙であり，天皇の出師の志と軍国主義とを区別しようとする彼の筆致は，つぎのような批判となる。「我皇上の師を出し給ひしは，恂に古人の所謂荊舒惟れ膺ち戎狄惟れ懲さんが為めなりしならん，真に世界の平和の為め，人道の為め，正義の為めなりしならん。而も如何せん，之が為め煽起されたる愛国心の本質は憎悪也，侮蔑也，虚誇也。征清役の功果を以て如何に国民全般の有形無形を利すべきかに至っては，一毫想ひ及ばざりし所に非ずや」（上掲36頁）。

本書の解説者山本正美氏は，皇室にたいする幸徳のこの当時の態度において，「皇室等の問題にたいする彼の所論は，検閲にたいする考慮や，国民の皇室にたいする宗教的関心を中立化させ，官僚・軍閥にたいする憎悪心をわきたたせることの必要より生じたるものと解すべき」（上掲，103頁）だとしているが，それほど単純ではなく，幸徳には，皇室にたいするある種の尊崇の念が，社会主義者となったのちも持ち続けられていったことからしても，特別の感情をもっていたとすることが適当である。なおこれについては，前掲，大原慧論稿を参照。

うな論理的不統一にもかかわらず，ともかく，この書は，幸徳の帝国主義にたいする告発の宣言文であるとともに，彼の社会主義者としての態度表明とみられるのであって，それは，つぎの「社会主義神髄」に至って一層明らかなものとなった。

産業革命（幸徳はこれを「殖産的革命」とのべている）以来の生産力の飛躍的発展の過程で，どのようにして貧富の対立が激化していったか，そうした分配の不公平に反対する社会主義の運動が，最初は空想的社会主義の名において，オーエン，カベー，サン・シモン，フーリェ，ルイ・ブランおよびワイトリング等が，そして後にはマルクスとエンゲルス（幸徳は，ここではエンゲルとしている）が，科学的社会主義をとなえることによって，のちにそれが，ドイツ社会民主党の運動となり，労働者の解放の実現は旦夕に迫っていることを力説している。この「社会主義神髄」における大きな欠陥は，さきの「帝国主義」においては，社会主義との関連についてふれられていたにもかかわらず，社会主義と帝国主義との関連がほとんどふれられておらず，ここにこの時期における日本の社会主義研究の水準を反映していることを感ぜしめるものがある。

これよりもさらに注目すべきことは，その無政府主義にたいする態度である。空想的社会主義を拒否したのち，科学的社会主義を支持し，「彼等は，無政府党に非ず，個人の兇行は何物をも得べきに非ざるを知る，其運動や必ず団体的ならざる可らず。彼等は虚無党に非ず，一時の叛乱が何事をも成すべきに非ざるを知る，其方法や必ず平和的ならざる可らず。然り彼等の武器や，唯だ言論の自由あるのみ，団結の勢力あるのみ，参政の権利あるのみ。於是乎万国の社会党は皆政治的方面に向って其運動を開始せり」とのべているのは印象的である。すなわち，ここでは，無政府党としてアナーキスト，そして虚無党としてナロードニキの戦術にたいして批判し，参政権による平和的革命の手段をもって，科学的社会主義の方法であることを主張し[(14)]，しかもその革命の方法は，「各国人文の程度，歴史の結果，社会の状態を異にするに従って，之が改造の順序方法亦自ら異らざるをえず」として，革命の径路の多様性を指摘していることもまた示唆的である。

しかしながら，「社会主義神髄」の付録として掲げられた5篇の論文，(1)「社会主義と国家」，(2)「社会主義と直接立法」，(3)「社会主義と国体」，(4)「社会主義と商業広告」，(5)「社会主義と婦人」は，彼がその当時記者として活躍していた「萬朝報」および「六合雑誌」に発表されたものであるが，当時の幸徳の思想傾向を探る上で，きわめて重要な史料である。すなわち，第1論文では，ドイツ社会民主党の主義とするマルクス主義は，一種の国家社会主義であるが，その場合の国家とは，「財産及び階級の支配なる現在の社会関係を維持せんが為めの組織的権力」ではなく，「社会の名に於いて生産の機関を有するに過ぎず，唯此一事，国家の最初の職務にして，亦最後の職務也，社会関係に於る国家の干渉は，一層は一層より漸々無用となって消滅するに至る『国家』である」として，正統派マルクス主義の国家観を道破していることがわかるのであるが，しかもなお，そのマル

注(14)「社会主義神髄」57頁。

クス主義理解は，ドイツ社会民主党の活動を通じてのマルクスであり，普通選挙権とならんで，とりわけ，スイスにみられるところの直接投票による立法への参加権の獲得に，第一義的な重要性が付されていることである。[15] このような論調は，第2論文に至って，全体を流れるモティーフたる役割を演じていることに注目しなければならない。これは，当時の幸徳の眼に映じた天皇制絶対主義に対しては，このレフェレンダムこそが，社会主義への第一歩としての民主化の手段として考えていたからであろうか。しかしそのすぐあとで，わが国の天皇の憲法にたいして，レフェレンダムをもって抵抗する志の微塵もないことをのべ，[16] 第3論文において，「国体に害がある」という一言をもって，社会主義はもちろん，あらゆる反権力的な言動や思想に取締りを加えられていることを積極的に批判しながら，しかもなおつぎのような一節を読むに至って，奇異の感に打たれるであろう。すなわち，「而して我日本の祖宗列聖の如き，殊に民の富は朕の富なりと宣ひし仁徳天皇の大御心の如きは，全く社会主義と一致契合するもので，決して矛盾する所ではないのである。否な日本の皇統一系連綿たるのは，実に祖宗列聖が常に社会人民全体の平和と進歩と幸福とを目的とせられたるが為めに，斯る繁栄を来したのである。是れ実に東洋の社会主義者が誇りとする所であらねばならぬ，故に予は寧ろ社会主義に反対するものこそ反って国体と矛盾するものではない歟と思ふ」。[17] ここには敵の武器を使って味方の力としようとするある種のレートリックを感ずるのであるが，ともあれ，後年の革命的サンディカリスト幸徳秋水とは，何と隔たっていることであろうか。では同時代人として，幸徳の自由民権から社会主義への転換に，大きな影響をあたえたといわれる片山潜の社会主義とは，一体どのようなものであつたろうか。

片山潜は，その生涯において，3つの異なった時期に3つの自叙伝[18]を書いている。それぞれに興味深いものを秘めており，とりわけ，1929年から32年の間に書かれた自伝「わが回想」は，きわめて詳細にその生涯を物語っている。これによれば，彼が社会問題に関心をもち，いわゆる労働問題の研究に志したのは，1888年，29歳にして彼がメリーヴィル大学に入学した頃であったが，その後，グリュンネル大学において，イリー教授に学んだ時からであったといわれる。[19] しかし彼の社会

注(15) 前掲書63頁。
(16) 前掲書69頁。
(17) 前掲書73—74頁。
(18) この3種の自叙伝とは，まず第1に日本共産党史資料委員会監修「片山潜選集」第1巻，昭和24年，真理社，所収，自伝，なおこれは，岩波書店から，1952年「片山潜自伝」として覆刻された。第2に，ソヴェートの雑誌「オクチャーブリ」誌に1930年から1931年にかけて6回にわたって発表された「歩いてきた道」は，片山潜の生誕70年を記念したものであり，これは，片山潜生誕百年記念会編「片山潜著作集」第1巻，1959年，河出書房新社として邦訳されている。そして第3に，「わが回想」（上下2巻）徳間書店，1967年，は，1929年から1932年までの間に書いたものであり，最初ソヴェート国立出版所との契約の下に書かれ，はじめはドイツで出版する予定で，片山みずから独語訳を行なっていたのだが，ナチスの抬頭のために目的をはたすことができなかったといわれる。その後，1964年にモスクワでロシア語版で発刊された。これらの3種の自叙伝についての比較研究については大原慧「日本の社会主義(その一)——片山潜の思想形成——」（東京経済大学会誌，第62号，1969年3月）が克明である。
(19) 「わが回想」（上）218頁以下参照。

思想に決定的な影響をあたえたのは，1894年（明治35年），３人の友人とともに社会問題研究のためイギリスに向けて旅立ったときにはじまる。この体験は，のちに明治30年（1897年），「英国今日之社会」として出版されたのであるが，この英国旅行がその後の彼の思想と行動にあたえた影響というものは，まことに決定的なものがあった。この点は従来，軽視されるところであるが，[20] 後に幸徳と決定的に対立するに至った議会主義的社会改良主義を中核とする彼の社会主義思想の骨格は，実にアメリカでの留学生活の体験，およびとくにその後の英国旅行の体験によって形づくられたものであり，若いときに留学し，ヨーロッパの進んだ社会および社会運動を目撃し，とりわけ進んだ議会政治に驚嘆し，そこでの生活経験を通じて得た知識を基礎として，社会主義の実践に踏み出そうとしたものであって，その意味では，1904年，アムステルダムにおける第２インターナショナル第６回大会における日本代表としての輝かしい業績も，そこでの体験として得られたヨーロッパ社会主義運動の分裂や相剋についての認識も，彼の多くの経験的知識のひとつにとどまり，彼の思想を豊かなものとし，その見聞を大いに深めるには役立ったことは疑いえないが，彼の思想を根抵から変革するまでには至らなかった。この点，幸徳が，明治39年アメリカに渡り，そこで，アナルコ・サンディカリズムの影響をうけ，その思想の根抵的な変革を迫られたのとはまことに対照的である。このような経緯からみるならば，片山初期の社会主義思想が，「都市社会主義」および「我社会主義」としてあらわれたのは決して偶然ではない。

われわれはしばしば，幸徳と片山とを比較する場合，明治40年代の革命的戦術論のみに焦点をあて，その相異を論ずるのが常であるが，この差異は，すでにこの初期すなわち，明治30年代の前半の時点ですでに明確に対照的なものがあったことは銘記されなければならない。「我社会主義」は，30章から成り，前半の15章において，資本主義を歴史的に描き，その没落の必然性のなかから社会主義が出現する過程を描き，社会主義の機構を分析し，その資本主義経済にたいする優越性を強調しており，史的唯物論の影響をみることができる。そこには，また明らかにマルクス経済学に依拠して解説していることを窺わせるものがあるにもかかわらず，その論理は不明確であるのみならず，さまざまな混乱がみられる。[21] しかし，「ツラスト」を論じて巨大独占体の支配する社会の運命を説

注(20)　片山と幸徳との思想の上での対比を，議会主義とアナルコ・サンディカリズムとしてとらえることは，もちろん誤ってはいない。しかしこの両者の思想の根底にまで遡って考えるならば，片山の農民的＝労働者的性格と幸徳の文人的・警世家的性格の対立にも帰することはできる。しかし片山の思想に決定的な影響をあたえたものは，イギリスでの体験であり，その意味で，その時期の彼の思想は，イギリス社会改良主義と第２インターナショナルの正統派マルクス主義であった。そしてとくに前者の彼の思想に及ぼした影響は，「我社会主義」「都市社会主義」に明らかであり，労働組合運動をその運動の中心に据えた彼の社会主義は，何よりも John Burns や Tom Mann らの新組合運動によっていた（「歩いてきた道」107頁以下）。彼の社会主義の幸徳のそれとの差は，実にその執拗にまで固守した労働組合運動にあったのであり，こうした視角は，しばしば軽視されている。たとえば，大河内一男「幸徳秋水と片山潜——明治の社会主義」講談社，1972年，および絲屋寿雄「日本社会主義の黎明」新日本出版社，1972年も例外ではない。

(21)　価値と価格との混同，剰余価値の法則が充分に理解されていないことが目立っているとはいえ，片山の経済学的認識は，幸徳よりも深いことが注目される（「我社会主義」第23章社会主義と価格をみよ）。片山潜「都市社会主義・我社会主義」実業之日本社，1949年，335頁以下。

き，「自由競争は其生れて以来今日迄之が終局点なる独占的産業社会に向って進歩し来れり，然り彼は百難を排して進取せり，何が故に玆に進まんと欲せしや，是れ彼の性質なり，彼は独占の地盤に達せずんば安心せず，資本家制度は独占時代に達せずんば止まず，然り而して此独占的産業社会——ツラストの社会——が資本家に取りて如何なる利益を与ふるや，又此ツラストの社会は資本家の黄金時代たるや，特に臨終の時代なるか，吾人は進んで之を研究せんとす。吾人は信ず資本家歴史の最後のページはツラスト時代にあるなりと……」[22]としている点は，幸徳の「ツラスト」論より一歩進んでいると考えられる[23]し，またはるかに詳細である。しかし片山が，経済学的にはるかに幸徳よりも進んでいた点は，その恐慌論の存在によって明らかであろう。いうまでもなく，その恐慌論は，いわゆる過小消費説にもとづくものではあるが，ともかくアメリカにおいて，早くから経済学および社会学の研究に志したことは，彼の経済学に，ある体系をあたえることとなったが，同時に，その社会主義論も，はるかに実際的性格を帯びるに至った。その「都市社会主義」がそれであって，これこそ，当時の東京帝国大学教授金井延によって，痛烈な批判をあびたところであった[24]。

たしかにその当時の片山の思想は，社会改良主義であって，金井のように，明治10年代のドイツに留学し，Gustav Schmoller や Adolf Wagner の指導の下に社会政策を専攻し，一方においてビスマルク政権の帝国主義政策と社会改良策，そして他方においてドイツ社会民主党の社会主義鎮圧法にたいする果敢な階級闘争を目撃した眼からみれば，その矛盾を衝き，理論水準の低さを暴露することはきわめて容易であったと考えられる。だが片山の社会主義が，「都市社会主義」としてあらわれたのは，彼のイギリスにおける体験の結果把握されたものであり，イギリスにおけるフェビアン協会や独立労働党の理論や政策に魅せられた結果であったし，後年の革命家，熱烈なボルシェヴィキ片山も，この時期，すなわち明治30年代から40年代にかけては，社会改良主義にもとづくイギリス流の社会主義の信奉者であったといっても過言ではない。

片山のこのような社会改良主義をもって，彼の思想的成長の過程，革命的ボルシェヴィズムへの一段階として，つまりその成熟した革命家としての後期の片山の思想にたいして未成熟な初期の運動家の思想として対照的に把握することはもちろん可能である。しかしこれとは別に，「都市社会主義」は，それ自体として，日本の社会主義の歴史の上に独自の意義と価値を見出すことができるのではなかろうか。

今日，自治体を中心とする行政が，市民の生活にきわめて重要な関係をもっていることがますま

注(22) 前掲「我社会主義」271頁—272頁をみよ。

(23) 幸徳の「社会主義神髄」には，マルクス「資本論」第八章「絶対的剰余価値の生産」，第1節労働日の限界に関連する内容が含まれているのは興味深い。前掲「社会主義神髄」27頁をみよ。ここにはまたツラストについてふれられているが，とくに恐慌について，彼一千八百二十五年の大恐慌以来，殆ど毎十年，期を定めて以て其禍を被らざるなきを見ば，如何に現時経済組織の根底が，深く剛致する所ありしかを知るに足らん」とのべている(上掲29頁)。1825年恐慌の世界史的意義に注目しているのは，鋭い経済学的認識を示すものである。

(24) 「労働世界」第46号，明治32年10月15日号。

す明らかとなっている。公害といわれる都市生活の複雑化にともなう環境の破壊が，今日の日本ほど深刻化しているところは少ないが，片山はすでに，「都市社会主義」の第一章において，「我東京市を如何にすべき乎」にはじまる諸章のなかで，遠い将来を予見し，日本の都市が，その文化的諸施設において，公衆衛生の点で，そしてさらに都市の政治の面で，いかに立ちおくれているかを指摘し，その改善を訴えている[25]ことは，その主張がたとえば，普通選挙権の獲得にみられるように社会改良であるとしても，今日からみても，まことに卓見といわなければならない。こうした彼の都市社会主義の構想は，イギリスにおける都市行政の視察と，「ガスと水道の社会主義」(Gas and Water Socialism) のスローガンの下に，都市自治体の社会政策に熱烈な関心を抱いて運動していたフェビアン協会の人々[26]やこれらの人々の運動と密接な関係にあった General Booth のロンドンの East End を中心とする救世軍の運動にたいしてある程度の認識があったことを意味するものであった[26]し，こうした都市問題への認識こそ，同じく East End の貧民窟の住人であった不熟練労働者を主役とする 1889 年(明治21年)の運動，New Unionism の運動にたいする驚嘆と密接に結びついていた[27]。片山の社会主義なるものが，1900年，治安警察法の圧力の下で普通選挙権の獲得と労働組合運動を柱として発展していったのは，幸徳との対立のなかで明らかになったのではなく，その根幹は，すでに30年代初頭，平民社が結成される以前にすでに形づくられていたものであり，それ自体，その当時のヨーロッパ社会主義運動のひとつの大きな流れの影響であることである。従ってこの時点ではまだ，幸徳と片山等の社会主義運動の戦術をめぐる論争は具体化しなかった。両者のイデオロギー的な対立をもたらす契機となったものは何であったろうか。その最大の原因のひとつが1905年のロシア革命であったことは明らかである。

(3)

明治37年3月13日の「平民新聞」は，「与露国社会党書」を掲載しているが，そのなかで，「社会主義者が戦闘の手段は，飽まで武力を排せざる可からず，平和の手段ならざるべからず，道徳の戦いならざるべからず，言論の争いならざるべからず。我は憲法なく国会なき露国に於て，言論の戦闘，平和の革命の極めて困難なることを知る。而して平和を以て主義とする諸君が其事を成すに急なるがために，時に干戈を取て起ち一挙に政府を顚覆するの策に出でんとする者あらん乎，我等は其志を諒とす。而も是れ平和を求めて却って平和を攪乱する者に非ずや。目的の為めに手段を選ばざるは，マキャベリー一流の専制主義者の快とする所にして，人道を重んずる者の取る可き所にあ

注(25) 「都市社会主義」第15章都市の衛生，を参照，前掲159頁。
(26) 前掲，片山潜著作集第1巻146頁以下参照。
(27) 真理社版，片山潜自伝，159頁「英国労働運動の指導者」を参照。

らず」とのべている。[28] これにたいして明治37年7月24日号の「平民新聞」第37号は，記者の名において，「然るに露国社会党は，之を見て大いに感ずる所やありなん，其機関新聞『イスクラ』の紙上に於て之に答ふる一文を発表したり，吾人は未だ直接に右『イスクラ』の露文に接せざれども，米国新聞の英訳に依りて其全文を見るを得たり」として，これを訳載しているが，そのなかで，「力に対するには力を以てし，暴に抗するには暴をもってせざるを得ず。されど我等が此言を為すは決して虚無党又は威嚇党としてにあらず。虚無党とは只彼の小説家ツルゲネフの想像の中に活躍し，欧洲上流社会の恐怖の中に生じたる産物なるのみ。我等は曩に露国社会民主党を建設してより以来，威嚇主義を以て不適当なる運動方法と為し，曾て之と闘ふを止めたる事なし。然れども悲むべし，此国の上流階級は曾て道理の力に服したる事なく，又将来然すべしと信ずべき些少の理由だも発見すること能わず」とのべている。[29] 記者は再びこれに註記して，「吾人は之を読んで深く露国社会党の意気を敬愛す。然れども吾人が曩に，暴力を用ゐる事に就て彼等に忠告したるに対し，彼らが猶終に暴力の止むを得ざる場合あるを言ふを見て，深く露国の国情を憎み，深く彼等の境遇の非なるを悲まざるをえず」としている。

このような暴力否定・平和革命主義の主張は，日露戦争勃発以前における平民社の運動の基調をなすものであり，堺利彦の言うように，最初から無政府主義の影響が強かったとはいえ，それは主として，ドイツ流の社会民主主義とキリスト教社会主義との混合であった。[30] しかし1905年のロシア革命の勃発と日露戦争後の内外の社会状勢の変化とは，平民社の運動を分解させ，社会主義運動をめぐるアナルコ・サンディカリズムと議会主義・改良主義との対立がはげしくなり，結局，大逆事件による幸徳等にたいする徹底的な弾圧によって，明治の社会主義はその幕が閉じられるのであるが，ここではイデオロギーとしての日本社会主義の分化が，この当時のヨーロッパ社会主義運動やその思想，あるいはひろく労働運動とどのような関係にあったかを考察してみることにしよう。

われわれはすでに，幸徳と片山とは，その思想形成の上で，いちじるしい差異があることに注目してきた。とくに片山は，1904年，オランダのアムステルダムにおいて開催された第2インターナショナル第6回大会に日本代表として出席し，ロシアのプレハーノフとともに大会の副議長に推され，日露両国の戦争を拒否し，両国人民の友好を誓って固い握手を交したことはよく知られているが，のちに片山は，「万国社会党」としてこれを出版している。[31] この著書は，「万国社会党大会」と「露国革命と総同盟罷工」の2部から成っており，とりわけ，後者において片山は，1905年のロシア革命に強い印象をうけていたことを示している。では，片山はこの第2インターナショナル第6回大会への出席および1905年のロシア革命によって，深刻な影響をうけたとしても，これを契機として，

注(28) 「平民新聞」第18号，明治37年3月13日。
(29) 「露国社会党より」「平民新聞」第37号，明治37年7月24日。
(30) 堺利彦「日本社会主義運動における無政府主義の役割」堺利彦全集第6巻（法律文化社1970年）283頁。
(31) 前掲，「片山潜著作集第1巻」（河出版）所収。

その思想は，どのような変化をうけたのであろうか。

彼はまず万国社会党大会の歴史を，1837年頃とし，その時点での Marx および Engels の活動を記録しているが，この運動についての記述は精密を欠いている。[32] しかし1860年代にはじまる第1インターナショナルの運動についての説明になると次第に正確となり，とくに社会主義と無政府主義との関係，および「万国社会党と修正派」と題して第2インターナショナル内部における修正主義としてフランス社会党の活動を論じ，第6回大会において，フランス社会党のジャン・ジョレスとミルランおよびドイツのベルンシュタイン，イタリアのトウラティを修正派とし，このような状勢のなかで，A・ベーベルとジャン・ジョレスの対立の模様を描写している。しかし片山は，彼自身が果して正統派マルクス主義と修正主義そしてさらに無政府派が渦まくインターナショナルの運動のなかで，どこに位置しているかについては，この文章のなかでは，まったくふれていない。[34]

注(32) International の歴史を，1837年頃としているけれども，この指摘は，何を意味するかは必ずしも明らかではない。1837年といえば，イギリスにおいては，彼の歴史的な革命的政治運動であるチャーティスト運動がはじまりかけた年であるが，Chartism がそのまま Internationalism に結びつくと考えることはできないので，これはおそらく，1830年の7月革命以後，パリを中心に組織された国際的な秘密結社，「正義者同盟」(Das Bund der Gerechten) の運動を指すものと思われる。もしそうだとすれば，Internationalism の歴史的根源をさかのぼってつきとめたものとして興味深い。この Das Bund der Gerechten は，のちに共産主義者同盟 (Das Bund der Kommunisten) となり，Marx や Engels がその会員となって活動し，1848年，Marx が，その第2回大会のために，「共産党宣言」を書いたものであることはよく知られている。おそらくこの問題の認識について，当時の片山は充分でなかったものと思われるが，しかし，このパリを中心とする「正義者同盟」が，のちに，国際的な組織としての 'International Association' と密接な関係があることを知るならば，まったく誤っているともいうことはできない。

(33) 1904年の第2インターナショナルのアムステルダム大会において彼がどのような態度をとったかは，最後の自伝「わが回想」にもっともよく物語られており，その他の2つの自伝は，叙述がその事件の前で終っており，ふれられていない。但し，この「わが回想」の叙述を，「万国社会党」のそれと比べると，疑問なしとしない点がみられる。すなわち，記憶のもっとも生々しい時点で書かれた「万国社会党」の叙述は，きわめて平静でしかも客観的な態度で観察し，「大会の大論争問題」において，正統派と修正派の対立の様相を，公平な第3者の眼をもって叙述しているかのようである（河出版「片山潜著作集第1巻」270頁以下参照）。ところが，「わが回想」においては，つぎのようにのべられている。

「尚大会の最後に政治問題討論の結論を硬軟両派が為して，特に投票採決行われんとするや，軟派（修正派のこと……引用者）の人々は，投票獲得に向って運動をはじめたことを予は知った。其運動の対象が日本代表であった。ジョレス派もあなどることは出来ない勢力であった。而も日本代表が斯大問題決定に対して重要な一票を持っていることが明らかになった。予は無論，他人の運動によって其所信を動かすような者ではないが，万国社会党大会の首領連中，殊に大会の会長ヴァンコールには分らなかったものと見えて，山出しの片山潜に甘言を以て近寄った。而も彼は片山を子供扱いにして，おまえが国に帰ったならばどんな書籍でも買って送ってやる！ などと一種の賄賂を提供して説いた。片山は断然拒絶した……，原案賛成が25票，反対が24票，1票の多数で硬派の主張が通過した。此1票は片山の投じた1票である……」（「わが回想」下，147—148頁を参照）。

この一節には事実をもとにしながらも，ある種の粉飾がなされているように感じられる。これは，片山がコミンテルンにおける日本代表の執行委員としての，「功成り名遂げ」た立場から，若き日の自己の活動を美化するような傾向が感じられる。この点について，大原慧氏が，つぎのように書いているのは，まことに肯綮に値しよう。「その欠陥の第1は，『わが回想』が書かれた時点における，かれ自身の思想を基準にして，過去の経験的事実が整理されていることである。円熟した思想で過去の経験的事実を整理することに問題があるのではない。この自伝には，かれの思想が未熟であった時代の経験的事実が粉飾されていたり，故意に抹殺されたりしている部分がかなり発見されるのである。これらの事実は，「自伝」執筆者のだれもが避けられない人間の劫なのであろうか」（大原慧，前掲，「日本の社会主義」10—11頁参照）。

(34) 前掲，片山潜著作集第1巻所収「万国社会党」をみよ。

ただ彼が1905年のロシア革命でもっとも強烈な印象をうけたのは，総同盟罷工であって，「社会主義の運動の結果としてストライキの勢力俄然として現出せしは露西亜なり[35]」，「露国の革命は実に非常なる教訓を世界の労働者に与えたり，殊に社会主義者に与へたるものは彼の同盟罷工なり，先に論述せし如く，和蘭の万国社会党大会に於てゼネラルストライキは最も慎重の態度を以てすべきことと決議せられしにも関せず，一昨年の一月以来，露国の労働者は同盟罷工を以て革命の手段とせり，電信技師，鉄道機関士火夫等に至るまで罷工し其勢力非常なり[36]」そしてさらに，「廿世紀革命の真相」において，「凡そ革命といえば多数の人民生命財産を破壊して一大改革をなし血を以て洗う事物が，革命の賜なりと思ひしに，二十世紀の今日露国に行われたる革命は然らず，智力もなき資力もなき労働者の只仕事を罷め饑を忍んで仕事もせず只工場に行かず家内手を拱ねいて居れば，即ち革命は成功す，労働者は只家に在りて一日なり二日なりの休息をなす之れ二十世紀の一大勢力となり，之がために露国政府は戦慄せり，実に古今無比の勢力にあらずや[37]」。

このように1905年の革命によって，片山が深刻な影響をうけたことは明らかであった。しかしわれわれは，この文章が，実に彼の同志として活躍し，後に日露戦争後，思想上および運動論上の対立から袂をわかち，はげしく対立した幸徳秋水が，明治39年に，「世界革命運動の潮流」と題して，神田錦輝館において行った演説の一節ときわめて類似しているのにおどろかされるであろう。

「於是乎，欧米の同志は，所謂議会政策以外に於て，社会的革命の手段方策を求めざるを可らず……而して彼は能く之を発見せり。何ぞや，爆弾乎，匕首乎，竹槍乎，蓆旗乎。

否な是等は皆な十九世紀前半の遺物のみ。将来革命の手段として欧米同志の執らんとする所は，爾く乱暴の物に非る也。唯労働者全体が手を拱して何事をも為さざること数日若くは数週，若くは数月なれば即ち足れり。而して社会一切の生産交通機関の運転を停止せば即ち足れり。換言すれば所謂総同盟罷工を行ふに在るのみ[38]」。

思うに片山は，総同盟罷工，いわゆるゼネラル・ストライキを，国際的な労働運動の重要な問題であり，ヨーロッパにおいては革命達成のための有力な手段として現実性をもつものとして把握していたことは疑いえないのであるが，日本における社会主義の現状からみるならば，到底その実現性は乏しいと考えていたのではなかろうか。その意味では，幸徳が，明治39年，アメリカから帰ったのち，ゼネラル・ストライキによって革命を達成しうると考えたのとはまったく対照的であったといっても過言ではない。直接行動論をめぐる片山と幸徳の対立の日本社会主義史上における意義を明らかにするためには，1905年の革命が，幸徳にあたえた衝撃について考察しなければならない。

堺利彦はつぎのようにのべている。「ロシヤに1905年（明治38年）の革命が起こった時，『週刊平

注(35) 前掲，273頁。
(36) 前掲，276頁。
(37) 前掲，277頁。
(38) 幸徳秋水「世界革命運動の潮流」「光」第16号，明治39年7月5日。

民』はそれに甚大の敬意を表したが，同時にそれの『暴力の行使』に対し，反対の意を表明した。それはもちろん，秋水の意見であった。その秋水が今度はようやく無政府主義的傾向を示してきた[39]」。このような幸徳の思想上の変化は，すでに指摘したように，その錦輝館に於ける演説「世界革命運動の潮流」において，Anarcho-syndicalism への転換がすでに明らかにされている。幸徳はつぎのようにいう。

「今や露国革命的同盟罷工は，仏国革命の十八世紀末に於けるが如く，西欧諸国の惰民を攪破したり。万国の同志，殊に仏国，西班牙，伊太利の同志は盛んに労働階級及び軍隊に向って革命を鼓吹し，議会政策の本場として，常に総同盟罷工を排斥せし独逸社会党すらも，其首領ベーベルは，総同盟罷工が階級戦争に於ける最後の手段たること宣言するに至れり。而して社会主義の発達未だ十分ならざる米国の如きも，亦選挙と議会とが革命に於ける効果の甚だ多からざるを見て，革命を讃美する声は，到る処の労働者間に反響せり[40]」。こうした Anarcho-syndicalism への傾斜は，明治40年2月5日の「平民新聞」の「余が思想の変化[41]」となってあらわれ，直接行動を鼓吹するに至るのであって，このような幸徳の思想の変化は，社会党第二回大会において，片山派の闘将田添鉄二と真向うから対立する結果を生み出したことは周知の事実である[42]。そしてこのような幸徳の思想の帰結は，彼の大逆事件[43]となって世界を震撼し，片山の未来は，実践的な労働組合主義者としての活動を経て，次第に社会改良主義から蟬脱し，ロシア革命とともに革命的ボルシェヴィストへの途であった。幸徳と片山の社会主義論を，われわれは日本への社会主義の風土化という観点から考える場合に，1905年のロシア革命の彼らの思想形成において果した役割をどのように評価すべきであろうか。この場合，1905年のロシア革命における労働者階級の役割を，彼らがどの程度理解していたかが問題となろう。

まず考えるべきことは，片山と幸徳の少年時代以来の生活環境および体験の差異である。片山は農民の子として育ち，アメリカでの苦しい労働生活の辛酸をなめつつ，文字通り，労働者階級の一

注(39) 堺利彦「日本社会主義運動における無政府主義の役割」(堺利彦全集，第6巻，法律文化社，1970年，281頁以下)。

(40) 幸徳，前掲，「光」第16号。

(41) 「余が思想の変化(普通選挙について)」と題する幸徳の論文（「平民新聞」第16号，明治40年2月5日）は，片山等の議会主義に対立させて，「労働者の直接行動(ヂレクト・アクション)」を高唱している重要な文章であるが，この変化を決定的にしたものが，明治39年から40年までのアメリカ旅行であったことは本人が告白しているところである。アメリカにおけるサンディカリズムの運動は，たとえば，IWW の創立にみられるように，明らかにヨーロッパにおける革命的サンディカリズムの運動の影響があり，その意味では，しばしば指摘するように，幸徳の思想上の変化も，1905年のロシア革命との間の関連を見出すことができると思われる。しかし，煙山専太郎の「近世無政府主義」をはじめ，クロポトキンなどの書物の上からの知識吸収の面も忘れられてはならない。とくに，堺利彦の雑誌「社会主義研究」(明治39年3月15日，第1号）が，海外の社会主義文献などの紹介をしており，こうした状況からみて，幸徳のアナーキズムの傾向は，ヨーロッパにおける運動と同時に，文献的な研究の面からも深められていったと考えるのが適当であろう。

(42) 幸徳と片山派の闘将田添鉄二の論争についてのくわしい叙述は，吉川守圀「荊逆星想史——日本社会主義運動側面史——」青木書店1957年にくわしい。なお，岡本宏「田添鉄二——明治社会主義の知性」(岩波新書）も有益である。

(43) 大逆事件についての研究は非常に多いが，さしあたり，幸徳の伝記として，田中惣五郎「幸徳秋水」理論社，また事件そのものをあつかうものとして，神崎清「革命伝説」1968年，芳賀書店をあげておこう。

員として自己を鍛え上げ，主としてアメリカにおけるキリスト教的教育の結果，社会主義に入ったものであり，とくにアンドーヴァー神学校においての深い宗教的体験は，キリスト者として，社会問題へ良心的な眼をむけることとなった。[44] 異国でのきびしい労働生活と信仰，そこでの社会問題および社会主義の研究，ＡＦＬを中心とする職能別組合の発展の目撃，またイギリスでの労働運動や社会主義運動の前進，不熟練労働者の覚醒をつげる新組合運動の勃発，こうした体験を通じて，片山は，ヨーロッパにみるような本格的な労働者階級の運動を日本に定着させるために何が必要であるかを徹底的に考えぬいた。しかし彼の思考様式は，あくまでも経験的であり，具体的でなければならなかった。片山が明治30年（1897年），高野房太郎らとともに，労働組合期成会の運動に参加し，鉄工組合の建設と発展に精力的な活動を開始したのも，共済活動を中心とする労働者の自主的な運動こそが，彼らを解放に導く唯一の途であることを信じて疑わなかったからである。[45] その意味では，治安警察法の制定も彼を挫折させるものではなかった。しかも片山は，高野と同じく，日本の労働者階級が若く，未熟であり，労働者階級としての意識が薄いことを知りぬいていた。[46] 日本の労働者の実力をもってしては，国家権力の強烈な圧力の下でゼネラル・ストライキが実に「画に書いた餅」であり，観念としてしか意味をもちえないことを知っていた。第２インターナショナル第６回大会での体験をはじめとして，ヨーロッパおよびアメリカでの労働運動の見聞は，むしろ日本の労働運動における困難を感ぜしめるばかりであった。幸徳のいうような direct action などは，当時の片山にとってはおよそ問題にならなかったのは，まことに当然であった。もちろん，片山には，明治絶対主義の下で，社会主義が容易に可能であるというような甘さがあったことは事実である。[47]

一方，幸徳の社会主義への途は，もっぱら読書によるものであり，自由民権運動からの脱却と克服の過程で得られたものであった。すなわち，しかも彼の社会主義思想は片山の如く，労働組合運動と直接的に結びつく形で発展したものではなく，漢学の素養と儒教思想を土壌として，いわば志士仁人の思想として形成され，中江兆民のフランス流民権論を媒介として形づくられたものであったといえよう。時代感覚に鋭敏な幸徳の思想は，片山のそれが明治末年までその思想的変化はきわめて緩慢であったのにたいし，幾多の曲折を経てきている。彼の Anarcho-syndicalism の思想把握は，志士仁人の怒りの象徴であったし，労働者の怒りが燃えるところ，至るところにゼネラル・ストライキはおこりうべき必然性を見出した。幸徳はヨーロッパに労働者の怒りの存在するところ，至るところゼネラル・ストライキがおこっており，とくに第１次ロシア革命においてこれをみたの

注(44) アンドーヴァ神学校時代の片山潜については，前掲，大原論文のほか，隅谷三喜男「アンドーヴァ神学校について」（労働運動史研究会編「労働運動史研究」第18号，1959年11月，《片山潜生誕百年記念特集号》）をみよ。

(45) 片山潜「労働団結の必要」（「六合雑誌」第199号，明治30年７月15日および８月５日）。

(46) これについては，片山潜「労働運動の前途」（「労働世界」第57号，明治33年３月15日）および赤羽生「労働者は何故に目覚めざる乎」（「社会新聞」第21号，明治41年10月20日）をみよ。

(47) 片山潜「日本に社会主義を行うは安し」（「光」第17号，明治39年７月20日）を参照。

であって，日本においてもそうした可能性はあり，また社会主義者は，これにたいして準備しなければならぬと絶叫したのである。とくに注目すべきことは，幸徳は，direct action を社会主義革命のためのもっとも強力な手段であることを強調するのであるが，議会改革やその他の改良政策をすべて無意味であるといっているのではない。この点しばしば見逃されることであるが，この点が，片山と対立しながら，また一方きわめて示唆的な点である。では，片山と幸徳のこの明治の巨人の思想は，彼らの主観的判断とは別に，世界の社会主義運動の潮流のなかで，客観的に，どのような地位をしめるものであろうか。

（4）

堺利彦はかつて，片山と幸徳の対立と自己の立場を比較して，みずからドイツ社会民主党中央派になぞらえたことがある。[48] しかし当時の堺自身の立場はたしかにカウツキーに近いものがあったとしても，片山と幸徳の対立は，社会民主党の左右両派の対立とのアナロジーにおいてとらえることは，必ずしも正しくはないのではなかろうか。1905年の革命を中心として，それ以後に発展した国際社会主義運動や労働運動内部の対立，すなわち，第1次世界大戦を前にして，正統派マルクス主義とこれに対立する修正主義との矛盾，正統派マルクス主義者といわれた Kautsky の中央派にたいする Rosa Luxemburg との矛盾，そして Lenin と Kautsky の対立，Rosa と Lenin の対立というまことに錯綜した国際社会主義運動の対立の重大な争点のひとつとして，帝国主義戦争の危機と社会主義革命の展望を前にして労働者階級を中心とする大衆運動（Massen-bewegung）と前衛政党との関係をどのように把握するか，この点にかけられていた。20世紀初頭においてにわかにたかまった反戦平和運動は，「単純なストライキ」（Einfacher Streik），ゼネラル・ストライキ（Allgemeiner Streik）という従来の労働組合運動を担い手とする伝統的な戦術のほかに，大衆ストライキ（Massen-streik），大衆行動（Massen-aktion）あるいは大衆運動（Massen-bewegung）という，帝国主義段階に特有なさまざまな矛盾に対応する新しい闘争形態が生み出された。こうした状勢を前にして Lenin と Rosa，Rosa と Kautsky，Kautsky と Lenin との理論上の，あるいは運動論上の対立がはげしくなった。それから日本における社会主義に微妙な影響をあたえたのである。

幸徳はしばしば，「総同盟罷工」（general strike）と「直接行動」（direct action）とを同じものとして把握し，直接行動のなかに総同盟罷工を包含させ，あるいは両者を混同して議会主義政策に対置

注(48) 堺は，つぎのようにのべている。「しかし堺が代表していた立場はまたすこぶるあいまいである。その立場はだいたい，正統マルクス派だと前に言ったが，その正統派が当時ヨーロッパにおいても，すでに実質上，はなはだ右傾したものであったということは，今日から見ればよく分っている。

だから堺の立場としては，幸徳氏に対しては，田添氏をしてこれに当たらしめ，田添氏に対しては幸徳氏をしてこれに当たらしめ，自分らはその中間に立って，直接行動と議会政策との併用論をもって一時を糊塗したという形である」（堺利彦「日本社会主義運動における無政府主義の役割」堺利彦全集第6巻，292—293頁）。

しているが，しかし，いわゆる general strike と direct action とは同じ現象にたいする異なった呼び名ではない。前者は，組織された労働者による一斉の全国的な規模のストライキであり，未組織の労働者もこれに呼応して起ち上ることが普通であり，たんなる経済的な要求のためのストライキではなく，いちじるしく政治的な色彩を帯びる。いわゆるカップ一揆にたいしてドイツの労働者が統一して行った1920年のストライキ(49)はその典型的なものといえよう。だが，direct action は，general strike とは異なる概念である。直接行動には，曖昧なそしてまたきわめて広い意味がこめられており，1860年代のロシアにおけるナロードニキによるテロリズムあるいは右翼ファシスト，井上日召らの唱えた一身一殺というテロリズムから，権力獲得のための武装蜂起までを含むものであり，Massen-aktion や Massen-bewegung と密接な関係をもっている。しかし何といっても general strike と direct action との重大な差異は，前者が組織的・目的意識的であるのにたいし，後者は，しばしば非組織的でしかも自然発生的であることである。それにもかかわらず，この両者は，革命的な状況の下では，しばしば混淆してあらわれ，Massen-streik, Massen-aktion および Massen-bewegung の展開(50)のなかで，革命的運動のそれぞれの局面における重要な構成要素をなす。このような意味で，direct action, general strike, Mass-strike, mass-action, mass-movement などが離れがたく結びついてあらわれ，より低次元のものから，より高次元のものに発展していく運動として，1871年のパリ・コンミューン(51)と1905年の第1次ロシア革命(52)が，世界史的な意味でもっとも代表的なものであり，

注(49) 1920年，ヴァイマール政府を打倒して軍部独裁を樹立し，王制復古を企てたウォルフガンク・カップ博士は，フォン・リュトヴィッツの率いる軍隊とともにベルリンの市庁舎を占領し，ヴァイマール共和国は危機に瀕した。大統領エーベルトは，3月16日，労働者にゼネ・ストを呼びかけ，これに応じて，約1,200万の労働者や事務員および官公吏がストライキに参加し，カップ一揆を打ち破った。これは，ゼネラル・ストライキとして成功した顕著な例であるが，防衛的であり，政治権力の打倒を目指す革命的なものではない。

(50) いわゆる Massen-streik の典型的なものとして，1905年1月から2月にかけてのルール地方の炭坑夫による大規模なストライキをあげることができる。Max Beer は，1905年（明治38年）12月15日の „Social-Democrat" 紙に，「ゼネラル・ストライキの歴史と意義」という論文を発表し（堺利彦編「社会主義研究」第5号——明治39年8月1日——に白柳秀湖の訳で紹介），またドイツ社会民主党の有力な指導者 August Bebel は，ドイツ社会民主党第16回大会に，ゼネラル・ストライキ採用の決議案を提出している（これも「政治的同盟罷工論」として同じ時期に紹介されたが，この決議案を幸徳が読み，影響をうけていることは，「余が思想の変化」のなかに明瞭によみとることができる）。このゼネラル・ストライキは，Emil Kirdorf のライン・ウェストファーレン石炭シンジケートの苛酷な労働条件にたいして反対して起ち上ったものであったが，ロシア革命の勃発とともに，その影響をうけて，普通選挙権獲得を要求する政治的な大衆ストライキ（Massen-streik）が，ドレスデンやハンブルクで行われ，これをめぐって，ＳＰＤと労働組合との間に矛盾が醸生されることとなった。ドイツにおけるこのような革命的状勢の切迫は，Massen-bewegung が，革命のための有力な武器であることが明らかとなったが，ＳＰＤの右派幹部および労働組合主義者は，はげしく反対したといわれる（小山泰蔵「ゼネスト——歴史になにを学ぶか」三省堂，1970年）。

(51) しばしば指摘されるように，パリ・コンミューンも，1871年3月19日，パリの労働者・市民の自然発生的な蜂起としてはじまったものであり，しかもその発端は，2月25日，臨時政府の首相ティエールが，プロシアとの講和条約に調印したとき，パリの民衆が，シャンゼリゼーなどの，プロシア軍に占領されると思われるところの大砲400門を，接収し，プロシア軍にひきわたさないようにするために，バスティーユその他の安全な場所に移そうとして，直接行動に出たことからはじまる。そうした direct action が mass action そしてさらに mass movement へと発展し，コンミューンの成立となったのであったが，但し，Commune は，強烈な自然発生性の発現ではあったけれども，明確な目的意識性に欠けていた。Lenin が，1904年，「何をなすべきか」において追求したのは，まさしくこの問題であった。

それゆえいまだ Lenin も，1917年のロシア革命の指導にあたって，この二つの革命的事件を歴史的教訓として学んだのである。(53)

しかし幸徳や片山は，この時点では，こうした革命の理論を理解することはできなかった。しかも何よりも決定的なことは，当時の日本には，このような運動の担い手を欠いていたことである。幸徳のいうところの直接行動や総同盟罷工は，そのまま直ちに社会主義革命に結びつくものではなく，その媒介として，さまざまな運動の段階を必要としたのであったが，片山はもちろん，幸徳もこれを理論的には把握していなかったことは事実であろう。(54) だが，幸徳のいう直接行動や総同盟罷工は，実はそれ自体，大きな問題提起を含んでいた。それは，彼の直接行動論が，足尾の大暴動事件

注(52) 1905年の革命の発端となったのは，当時，ペテルブルク最大のプチーロフ工場（1万3千人）での4名の労働者の馘首であった。この4名が，僧侶ガポンが警察と連絡して設立した一種の御用組合「サンクト・ペテルブルク工場労働者のつどい」（以下ガポン組合と略称）に所属していたため，ガポン組合でこの問題をとりあげ，やがてこれがプチーロフ工場の全労働者の問題としてストライキが決行され（1月8日），それが市内各工場にいたガポン組合員の工作その他から，やがて，ペテルブルク全市のゼネ・ストに発展し（1月8日），その過程で，労働者の要求を皇帝に直接請願する方向に運動が向けられて，1月9日の「血の日曜日」事件に至った。この事件以後，全国的に労働者による未曽有の抗議，連帯のストライキがおこり，一職場の労働者の馘首の問題から一工場全体のストライキへ，一工場のストライキから一都市全体へのストライキに，そして一都市のゼネストから全ロシアをおおう Massen-streik の運動へと発展した。この場合にも，もっとも低次元の問題からより高次の段階へ，そして革命的な運動へと発展したのである（西島有厚「1905年の労働組合運動」，江口朴郎編「ロシア革命の研究」1967年，中央公論社，所収，124頁以下）。なおロシア革命と労働組合運動との関係については，西島有厚「ガポン組合とプチーロフ工場のストライキ——『血のメーデー事件』にいたる労働運動の発展」（上，中，下）（労働運動史研究会編集「労働運動史研究」23，1960年9月，24，1960年11月，25，1961年1月，大月書店）を参照。

(53) Lenin は，その「国家と革命」のなかで，1871年，パリ・コンミューンの意義について，つぎのようにのべている。「1871年のヨーロッパ大陸では，プロレタリアートは，どの一国でも人民の大多数をしめてはいなかった。現実に人民の大多数を運動にひきいれる『人民』革命は，プロレタリアートと農民のいずれをも包擁したときだけ，このようなものとなることができた。両階級こそがその当時の「人民」を構成していたのである。この両階級は，『官僚的＝軍事的国家機構』が彼らを抑圧し，圧迫し，搾取していたことによって統一されていた。この機構を粉砕しうちくだくこと——これが「人民」の，人民の大多数の，労働者と農民の大多数との真の利益であり，これが貧農とプロレタリアとの自由な同盟の『前提条件』であって，このような同盟なしには，民主主義は不安定であり，社会主義的改造は不可能である。

周知のように，パリ・コンミューンは，まさにこのような同盟にむかって道をひらこうとしたが，内外のいくたの原因のために，その目的を達しなかった」（レーニン「国家と革命」宇高基輔訳，岩波文庫，60頁）。

1905年のロシア革命のなかに，彼は「人民大衆，人民の大多数，抑圧と搾取におしひしがれた社会の最「下層」が，自主的にたちあがって，自分たちの要求の刻印，破壊さるべき古い社会のかわりに，新しい社会を自分流に建設しようとする自分たちの試みの刻印を，革命の歩み全体のうえに印す」ことをみたのであって，Paris Commune の場合と同じく，そこには，Proletariat というよりは人民大衆＝Massen の運動をみたのであり，Massen-streik および Massen-bewegung の革命における重大な意義を理解したのである。

(54) 明治43年12月18日，幸徳がその担当弁護人，磯部四郎，花井卓蔵，今井力三郎三氏にあてた獄中書簡は，Anarchist としての彼の立場を明らかにしたものとして興味深い（幸徳秋水全集，明治文献，第6巻所収）。このなかで彼は，無政府主義＝直接行動＝暗殺という当時の支配者の論理を鋭く批判し，大逆事件の陰謀的性格を暴露しており，死を前に，円熟した彼の思想を吐露したものとして印象的である。しかしここでも，直接行動＝総同盟罷工（ゼネラル・ストライキ）として把握されている。従って，Massen-streik や Massen-bewegung という概念は提起されていない。彼は，クロポトキン「麵麭の略取」，マラテスタ「無政府主義と新労働組合」およびロラー「経済組織の未来」の翻訳を通じて，サンディカリズムを理解していたように思われるけれども（前掲，全集，第7巻所収），Massen-bewegung による旧い国家権力の破壊の問題については，これを無視している。なおこの幸徳のこの獄中書簡によって，最初は，「弁護の余地なきのみならず，国民としては，余りにも破倫無道の挙たり」としていた石川啄木が衝撃をうけ，思想に変化をきたしたことはよく知られている（啄木全集第十巻，感想・評論3，岩波書店，1954年）。

やサンフランシスコにおける大地震から大きな示唆をあたえられていることからも明らかなように，その直接行動＝総同盟罷工論は，大衆行動や大衆ストライキおよびより高次元の大衆運動を意味していたからである。しかしその反面，彼の直接行動は同時に，大逆事件にみられるように，天皇暗殺として理解されるような面も暗示していたことも疑いえないところである。かくして幸徳の「直接行動論」は，きわめて未成熟ではあるが，明治社会主義思想の最高峰としていまもなおわれわれの前に屹立する。片山も幸徳も当時このことを意識しなかった。幸徳は，このことを充分に意識することなくして，大逆事件に連座してしまった。片山が，かつての同志であり，論敵でもあった幸徳の問題提起の重大性をはじめて理解したのは，明治44年，東京市電のストライキを指導して，勝利をおさめたのだが投獄され，明治の専制的国家権力の壁の厚さを身をもつて体験し，のちにロシア革命の勃発に直面してからのことではなかったろうか。

——1972・11・23——

〈追記〉 本論文は，去る11月11日，松山商科大学において行われた経済学史学会第36回大会において報告されたものをまとめたものである。報告時間が45分間のため，充分に問題を指摘する余裕がなかったので，ここに更めてできるだけくわしく論じたものである。なお，報告に際し，有益な助言や質問を惜しまれなかった松岡保，倉田稔，玉之井芳郎，水田洋の諸氏の御厚意に感謝をのべさせていただくものである。

（経済学部教授）